研究ノート

「命こそ宝」の思想
―政治の視点から―

“ Life is treasure ”
―From a point of View of Politics―

西　原　森　茂

目　　次

Ⅰ．生への自覚
Ⅱ．状況の展開
Ⅲ．社会的連帯

Ⅰ．生への自覚

夏目漱石の『草枕』の冒頭に次の一節がある。「山路を登りながら，こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると，安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時，詩が生まれて，画が出来る。」と。古今東西，人は窮地におちいったとき，自分を振り返る。沖縄の人々は，第二次大戦で灰燼に帰した焼け跡に立って，「鉄の暴風」の中をくぐり抜けて来た我が身を信じられない思いで振り返った。国のために我が身を捧げることのみを考えていたことから抜け出て，「生きる」ことを「悟った時」周囲が次第に見えて来た。それはちょうどプラトンが洞窟の比喩で述べているような，洞窟の外の光のなかで，影でなく，本物の自分を見ることに類似している。

沖縄の人々は，生命の大切さ＝「命どぅ宝」に目覚めたのである。古堅実吉は，回想録『命かじり』で，次のように記している。

「いよいよ，裏手の山まで米軍が迫った6月18日（1945年），（日本）軍司令部の指示により師範隊は解散して，国頭へ突破せよということになった。その命令は，19日早朝に自活班にも伝えられた。その日は朝から砲弾が激しく，一歩も岩陰から出られない状況で，とうとうきび取りもできずじまいであった。日が暮れて間もないころ，野田貞雄校長先生の一行が姿を見せた。（中略）校長先生は，私たち最下級の生徒を見まわしながら，ゆっくりと話を始められた。（中略）『死んではいけないよ。いいかい，決して死に急いではいけない！　君たちは敵の第一線を突破して背後の住民と共に生きるんだよ。多くの若い人々が倒れていった。君たちは，残されたこれからの指導者だ。沖縄の今後の・・・』「私たちは小学校のころから，天皇のために死ぬことを，“これが大和魂だ”と教育され続けてきた。だから，負け戦で生き残りが許されるなどとは考えても見なかったし，玉砕あるのみだと思っていた。校長先生の訓示は，当時の私にはよく理解できない点もあったが，しかし，死ななくてよい，生きてよいとの『お許し』を得たような思いとなって，国頭突破への大きな勇気づけになった」のである。

野田先生の訓示は，郷里を出るとき言われた母の言葉「もし，沖縄が戦いになっても，帰れるときはいまの避難小屋に来るんだよ。（中略）命どぅ宝どう！」と告げられたこととともに古堅の心に残る言葉であった。

ところで「命こそ宝」という言葉には，沖縄戦によってまったく変化した状況のなかで，新たな意味が付与された。すなわち，「鉄の暴風」といわれた戦火から生還した安堵感のみでなく，戦争の理不尽さに気づき，自然主義的な意味から社会的関係における財産として，「命」を共有しなければならないとする認識である。

Ⅱ．状況の展開

沖縄戦の悲惨な状況については仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』をはじめ，多くの著作がある。阿波根昌鴻は，『命こそ宝―沖縄反戦の心』で，「1945年4月21日，戦闘が終わってガマをでたとき，わしは目の前に散らばっている死体を見ました。子ども，老人，女の人たち，もう無差別に殺されていた。死体が腐れかかって，島全体に散乱していたのです。一体この子どもたちに，この老人たちに何の罪があったというのか，どんな悪魔であっても戦争ほどひどいことはできない。どんな地獄であっても戦場には及ばない。そう思わずにはいられなかった」という。「財産も権利も生命も無視され，踏みにじられていた米軍の占領下から解放される」ことを念願し，「平和憲法の下に復帰することを願って」「沖縄人の沖縄になる，そして平和に暮らすことができる。そう信じておりましたし，そうでなければいかないと思っておりました。だが，そうはなりませんでした。」それどころか，「復帰しても基地はなくならない。軍事的に強化され，自衛隊もくる」，安保条約が「危険条約」であることもわかってきたのである。

そこで，阿波根は土地を守り，軍事基地に反対する活動を続けるのである。「土地を守るのは，自分たちの命を守り，日本の国を守ることである。ひいては世界平和のためであり，結局はアメリカの人たちのためにもなる，だからずっと基地反対と土地を守る会はつづけなければならない。そういう考えでやっておる」という。阿波根によると，命を脅かす元凶は軍事基地や戦争であり，「土地闘争を続ける中で，平和を実現するためには，戦争というものを根本から勉強し，若い人たちに戦争がいかに無惨なものであるかを知ってもらう活動が大切である」という。

そのために彼は，反戦平和資料館を建立し，伊江島で集めた薬莢，不発弾，模擬弾，軍用パラシュウト，バラ線，それに軍服や戦争中の生活用具などを展示し，戦争の歴史を語り伝えようとするのである。それは伊江島

での体験に基づき，反戦平和の運動を観念的ではなく，現実に立脚して展開していくための方策である。「資料館は5分でも見れる，1日でも見れる，1か月でも見れる」ものとし，それぞれの展示品にどんな歴史がこめられているか，戦争とはどんな結果をもたらしたのか考えさせる配慮がされているというのである。

そして，来客と反戦平和について話し合うことによって運動を展開しようというのである。阿波根の反戦平和運動は，伊江島に止まらない。東京の中央労働学院へ若者を派遣し，あるいは自身も出かけて行って「勉強」することによってさらなる展開を図ったのである。それは，プラトンがアテネの民主制を高めるためにアカデミアを創設し，若者を教育したことに類するものであろう。

ところで，上述のように，「命こそ宝」の思想は，第二次大戦を経ることによってその概念が変化した。政治体制（＝天皇制国家）の中に埋没していた者が，戦争の不合理さに気づき，「命こそ宝」を自覚しはじめたのである。「命こそ宝」の思想は，いわば，Th. Hobbes の「自然権」の思想に類似するといっても良いであろう。詳述するまでもなく，Hobbes の自然権論は，近代イギリスの内乱のなかで，新たな主権国家を形成する主要な意味をもっている。

Hobbes にとって自然権の設定は，彼のペスミスティックな人間観の故に，中世的人間観を否定して，合理的な人間観に基づく。すなわち彼のいう自然人は，万人の闘争に至ると考えるが故に，理性の教訓としての自然法に導かれる必要があった。彼のいう自然法とは，「各人は望みのあるかぎり，平和を勝ちとるように努力すべきであり，それが不可能な場合には，戦争によるあらゆる援助と利益を求め，かつこれを用いてよい」ということであり，さらに，「人は他の人々も同意するならば，万物に対する権利を放棄すべきであり，自分が他人に対してもつ自由は，他の人々が自分に対してもつことを自分が進んで認めること」である。それを認める限りにおいて，権利を実行する義務を負う。そこに近代的な意味における政治的人間が出現するのである。

「命こそ宝」の思想も個々人の内面に止まるのではなく，反戦の思想として社会的な場において共有されるべく，復帰運動のなかで展開される。

Ⅲ．社会的連帯

古堅実吉が政党活動を通して政治に関与していったのに対して，阿波根昌鴻は反戦平和の思想に基づき，社会運動を展開した。両者とも天皇制を否定する点においては共通しているが，阿波根は米軍に対決し，土地闘争を通して平和運動に身を投ずるのである。

いつか「天皇を崇拝する人たち」が伊江島の資料館を訪問した。その人たちに阿波根は次のように話した。

「天皇の御代を千年も万年もあらしめたいと思われるのでしたら，私たちと一緒に基地をなくし，自衛隊，安保をなくし，平和憲法を守る運動をなさればよろしい。だが，今のままなら今度戦争になったら，原爆，水爆が落ちるのは，まず皇居であろう。そうしたら天皇の御代はこれでおしまい。私たちは命がけで平和運動をしておる。これは天皇を不幸な目にあわせない運動でもある。みなさん方も，私たちと一緒に平和運動をやりましょう」と。また，彼によれば，天皇制は必要ないが周囲が許さない，これは天皇がこれらの人々に利用価値があるからだ，という。

では，それに代わりうる制度としてどのような制度が適当か，については管見の限りでは不明である。

詳述するまでもなく，今日，人権の保障は究極的には制度によってなされる。しかし制度は，人々の協働によって支持されるのであるから，制度に対する人々の理解が必要である。第二次大戦後50余年が過ぎ，戦争に関する認識も変化してきた。とくに，沖縄と日本本土との間において，米軍基地への対応一つとってみても，その「温度差」は歴然としており，その根底に戦争観の違いがあるとすれば，沖縄からそれらに関連する諸問題（イシュー）を提起することは，当然といえるであろう。

阿波根は，一人息子を戦争で失ったというのみでなく，つまり戦争が過

去のこととしてでなく，またもや戦争準備のための米軍であれ自衛隊であれ，演習を見ると，反戦運動に立ち上がるのである。そのことが日本国憲法の平和主義を充実・発展させ，世界平和に通じると，彼は確信する。彼にとっての平和運動は，遠大な理想ではなく，現実的，直接的にかかわっている伊江島の闘争に収斂され，その経験を踏まえて展開される。

古堅は，伊江島の土地闘争を阿波根と共に経験している。しかし彼は，上述したように，政党を通して全国レベルで活動する。古堅にとって，政党や議会活動を通して「命こそ宝」の思想が具体化される。両者は，政治の個々の政策については意見を異にすることもあるであろうが，「命こそ宝」の思想を，ちょうど，T．ペインが，アメリカ植民地の状況を変革すべく「コモン・センス」を書き，自由・平等な社会を築こうとしたように，新たな状況作出のエネルギーとして，社会連帯の核に位置づけ，展開している。

（敬称略）

参考文献

1）古堅実吉『命かじり』，琉球新報社。
2）阿波根昌鴻『米軍と農民』，『命こそ宝』，岩波新書。
3）Th．ホッブズ（永井道雄訳）『リヴァイアサン』，中央公論社。
4）福田歓一『近代政治原理成立序説』，岩波書店。
5）田中浩『ホッブズ』，研究社。
6）トーマス・ペイン（小松春雄訳）『コモン・センス』岩波文庫。
7）中村雄二郎『共通感覚論』岩波書店。